

感染症を学ぶ人のために

感染症の取り扱い領域は幅広く、原因微生物から疾患、適応となる薬剤に至る広範な知識を身に付けることは、一朝一夕ではできません。臨床検査技師、薬剤師、看護師、医師……それぞれの職域に合った専門知識を深めることに必死で、広い視点で学習を進める余裕がないと感じている読者は多いと思います。それほど、感染症を基本から順序立てて学ぶことは難しいのです。

しかし、感染症全体を俯瞰するためには一つのコツがあります。それは、「①臨床状況から問題の臓器を考え、②そこで問題を起こしている微生物を予測、同定し、③予測、同定された臓器、原因微生物に基づいて感染症治療薬を決定する」という、感染症診療の原則を学び、実践することです。自身の専門知識がどう他の領域とリンクするのか、それを考える力を養うとも言い換えることができるでしょう。

本書は、膨大な量の知識が求められる感染症領域において、「原因微生物—臓器—薬剤」それぞれの関係性を簡単に調べられるクイックリファレンスです。感染症診療の原則を学ぶ教科書として、そしてもちろん現場における実践書として、さまざまなシーンでお使いいただくことができます。

本来であれば、青木眞先生が執筆された 1,500 頁を超える大著『レジデントのための感染症診療マニュアル』(医学書院刊)を学ばなければならないのが感染症領域ではありますが、本書では原因微生物、原因臓器(治療効果の判定)、感染症治療薬という 3 つの単元ごとに必要な知識を抽出しています。また、各内容はそれぞれの専門職である、微生物＝臨床検査技師、臓器＝感染症医もしくは総合診療医、感染症治療薬＝薬剤師が中心となって、網羅的に執筆されています。

薬剤耐性(AMR)対策の急務が叫ばれている昨今、本書によって適正な感染症診療の実践を促し、AMR 対策とともに感染症を学ぶ機会の布石となることを期待しています。臨床検査技師だけでなく、医師、看護師、薬剤師、そして医療従事者全般に広くお役に立てば、これ以上にうれしいことはありません。

企画者一同